

国際政治史の目から

—民族と歴史—

藤 木 登
(法 学 部 教 授)

八月初頭のイラクのクウェート侵攻の衝撃により、ソ連・東欧での出来事がかすんでしまった感じである。これはコミュニケーション発達のアイロニーといえよう。

しかしソ連・東欧問題の重要性がなくなったわけではない。ここではそのうち民族問題をとりあげてみる。

ソ連はもちろん、ユーゴスラヴィア(6共和国からなる連邦は解体にひんしている)、チェコスロヴァキア(チェック人とスロヴァック人の対立が共和国をおびやかしている)、ルーマニア(ハンガリー人を多くかかえるトランスシルヴァニア問題が流血をまねいた)などで民族問題が噴出している。同時に国家間にも民族に関する対立が生じている(ルーマニアとハンガリー、ユーゴスラヴィアとアルバニア、ルーマニアとソ連等々)。社会主義において、民族問題は解決されるか、あるいは大きな問題とならないと考えられていたようである。しかし経済と同様、民族問題もうまくいかなかった。そしてこの2つは深いところで関連していると思われる。どちらも人間性の改革を条件としているからである。現状では社会主義において、民族問題はより先鋭化する可能性がある。

国際政治史をやっている者として感ずることは、民族というものの「しまつのおえなさ」「扱いづらさ」「もつれた糸のほぐれなさ」ということである。「民族は集団的記憶で行動する。そして記憶は歴史である。」といえる。現代は体制をとわず民族問題において、歴史の反逆にあっているのだろうか。

- (1) 民族問題が生じているところを見ると、かならず、大事件がそうであるように、事(歴史)が複雑にからんでいる。上記ユーゴスラヴィアを見る。連邦を構成する6共和国(セルビア、モンテネグロ、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、クロアチア、スロヴェニア、マケドニア)のうち、セルビアとモンテネグロは約5世紀間のオスマン=トルコ帝国支配より、1878年に独立、同時にボスニアとヘルツェゴヴィナ両州に対する行政管理権がオスマン=トルコよりオーストリア=ハンガリー帝国に移った(ベルリン会議)。この2

州は1908年にオーストリア＝ハンガリーに併合される（いわゆるボスニア事件、第1次世界大戦の有力な原因となる）。マケドニア（13世紀の大ブルガリア帝国の領土。この帝国は14世紀に大セルビア帝国に吸収される。セルビアは14世紀末にオスマン＝トルコ帝国の支配下に入る）は1912年、13年の2度のバルカン戦争の結果（オスマン＝トルコがバルカンの支配を失なう）セルビア領となった。クロアチアとスロヴェニアは第1次世界大戦後にユーゴスラヴィア（1929年まではセルブ＝クロアート＝スロヴェーヌ）王国が設立されるまでは、オーストリア＝ハンガリーの領土であった。しかし両者の経歴はかなりちがう。クロアチアは11世紀にハンガリー王国の支配下に入った。そのハンガリーの大半が16世紀前半にオスマン＝トルコの支配下に入った（西のオーストリアに沿った部分はオーストリア領となる）時、クロアチアはオーストリアとオスマン＝トルコに分断された。オーストリアが強国となり、かつヨーロッパに対するオスマン＝トルコの圧力に終止符をうったカルロヴィッツ条約（1699年）により、オーストリアがハンガリー全体を取得して以来、クロアチアはハンガリー領としてオーストリアの支配するところとなった。一方スロヴェニアは14世紀にオーストリア（ハプスブルク家）領となり、以後第1次世界大戦後まで一貫してオーストリア領であった。したがってクロアチア、スロヴェニアともオーストリアとの関係が深く、ローマ＝カトリック的色彩が強い。またドイツ的影響を受けており、工業が発達し、生活水準も高い。一方ユーゴスラヴィアの盟主たらしめるセルビアはオーストリアとの関係はなく、長くオスマン＝トルコの支配下（14～19世紀）にあり、宗教はギリシア正教である。トルコ支配に入る前に大セルビア王国を持った誇り（歴史）がある。

もう1つ例をあげる。チェコスロヴァキアである。この国も第1次世界大戦後のオーストリア＝ハンガリー帝国の解体の結果、チェック人の住むボヘミア（ベーメン）、モラヴィア（メーレン）とスロヴァック人の住むスロヴァキアより設立された。前2者は大体同じ歴史を持っているが、スロヴァキアのそれは大きく異なる。モラヴィアとスロヴァキアとの境はライタ川という小さい川である。川のむこう（トランスライタ）はスロヴァキアであり、ハンガリーである。こちら（ツィスライタ）はボヘミア、モラヴィアでありオーストリアである（そしてハンガリーはオーストリア領である）。ボヘミア、モラヴィアは神聖ローマ帝国領であり、スロヴァキアはそうであったことはない。チェック人はかつて王国（モラヴィア王国あるいはボヘミア王国）を持ったことがあり、オーストリア支配下に近代には産業の発展を見せ、先進地域である。一方スロヴァック人は長くハンガリー人の支配下であり、いわゆる劣等民族とみなされ、産業の発達もなかった。かって単一の国家を形成したことはない。したがって新生チェコスロヴァキア国家

において、スロヴァック人とチェック人の対立は根強く存在し、前者は後者による支配に敏感に反応することとなった。この対立は1938年のミュンヘン協定(ズデーテン危機)後、ヒトラーの干渉を招くこととなった。ヒトラーはスロヴァック人の反感を利用し、スロヴィキアの独立をそそのかした。スロヴァック人はいかなる方法によっても独立を望んだのであろう。しかしここで1) ナチスの力をかりても、同族(西スラヴ)のチェック人と手を切って、スロヴァック人の独立国家を持つこと。2) ヒトラーがスラヴ民族であるスロヴァック人の独立を真剣に考えていたか。この2つが問題ではある。結果は1939年春に示された。スロヴァキアの独立宣言後、ドイツは武力恫喝により、チェコスロヴァキア大統領ハーハにボヘミア、モラヴィアのドイツ併合条約を強制した(何回も卒倒したといわれる)。こうしてボヘミア、モラヴィアは大ドイツ帝国の領土となった。チェコスロヴァキアを解体して独立を得たスロヴァキアはどうなったか。ドイツの保護国である。ボヘミア、モラヴィアは国家としては消滅した。たしかにスロヴァキアは国家として残ったが、ドイツの衛星国としてである。結果的にはスロヴァキアはナチスの協力者として戦争を終ったのである。このことはソ連がスロヴァキア西部のルテニア地方(ウクライナ人居住)を取得するに際して、痛痒感を多少和らげたかもしれない。

同じ様なことがユーゴスラヴィアについても言える。セルビアに対するクロアチアの反感はナチスの利用するところとなった。1941年春のドイツのバルカン作戦により、ユーゴスラヴィアはドイツに占領された。セルビアはドイツの軍事占領下に入ったが、クロアチアには親ナチの独裁政権が成立し、スロヴァキアと同じ立場になった。どちらも得たものとはかく独立ではあった。苦い報酬。ヒトラーの力をかりる(したがって衛星国たらざるをえない)ぐらいなら、独立はいらぬといえるのか、ナチスと手をにぎるぐらいなら、いっそ支配されることをえらぶといえるのか。

- (2) 民族(ユーゴスラヴィアやチェコスロヴァキアなどの例が示すように、1つの集合としての民族をどのように考えるかは歴史的、そして主観的要素が重要である)は国家として独立すべきであるというのは近代以後当然のことと考えられている。このことに異議をとなえるつもりはない。しかしこれは問題の終りでなく、はじまりのようである。そしてこのはじまりは最初からもつれている。現代国際政治における民族国家の並立(自然状態)という問題はおくとして、そもそも民族国家は可能なのか。「民族は従うものを波にのせ、さからうものをひいて行く」という時、ひかれて行く他の民族がかならずいるのである。ヴェトナム民族の独立要求に対して、フランスが、ヴェトナムの少数民族(中部山岳地帯)の権利を持ち出して対抗したことがあった。そのユーモア感覚(フラ

ンスはまじめでありました)にわらえたことがある。しかしヴェトナム独立後、その少数民族の運命はどうなったのであろうか(イラクのクルド族の運命は毒ガスであった)。

民族国家はその主力民族により大まかに形成されざるをえない。国境線1本で多数、少数がところをかえる。近代国家はその出生の時からそのほとんどが民族問題を抱えていた。しかし民族国家の大義の下にその輝ける面がクローズアップされ、少数民族問題はその反対面としておとしめられてきた。現在の少数民族問題はこの「おとしめられた」部分の復権である。

- (3) 国境の問題の他に民族問題に大きく係わるのが、上位システムとしての国家と下位のそれとの関係(たとえば連邦)である。国境が「よこ」の問題とすれば、これは「たて」の問題である。現在問題となっているバルト3国(エストニア、ラトヴィア、リトアニア)を見よう。

ロシアは18世紀にエストニアの大部分をスウェーデンから、ラトヴィアとリトアニアをポーランド(ポーランド解体)から取得した。この3地方の住民はスラヴ系ではない(異論もある)。エストニア人はフィンランド人と同族(言葉も通じるらしい)であり、ラトヴィア人(レット人)とリトアニア人はかなり古に時代にバルト人(インド=ヨーロッパ語族)から分化したといわれる人たちである。このバルト3国の中で最も強硬にソ連からの完全独立を要求しているのはリトアニア共和国である。それには理由がある。前述した民族の記憶(歴史)である。リトアニア人は14世紀に大公国を建設し(同じ頃ロシア帝国の前身であるモスクワ大公国と同格であった)、14~16世紀にはポーランドと同君連合を形成し、リトアニア=ポーランド大帝国(ヤゲロー朝)としてヨーロッパに君臨した。

多くの民族は過去において国家を形成したことがある。そして最大の版図を持った時の国家を民族の最盛期や栄華として追憶する。一つの民族が最大版図を示した時は、大体において他の民族は苦難の時である(ポーランド国家は100年以上消滅していた)。それぞれの民族は自国の領土として過去の最大版図を主張(過去の栄光への同化)しがちであり、こうして地球の表面は主張される領土がいく重にもかさなることになる。戦争とは重複した領土を一重にすること、あるいは何本もの国境を一本にすることである。

- (4) 最近国際政治などで民族のアイデンティティということがいわれる。この言葉の意味は多様であるが、「かれらとはちがうが、われわれは同じである」という意識と考えられる。エストニア人はロシア人とはちがうと考え、ロシア人とは別のアイデンティティを

持つと思っているのであろう。この意識の形成に歴史が大きくかかわっている。

民族の単なる差異（並列関係）と差別（非並列あるいは上下関係）とは本来別のものである。単にちがう民族に属する人々が平穏のうちにくらすことと、今もいたるところに見られる民族間の流血の惨事との間には無限の過程が存在するだろう。階級でなく民族である、あるいはその逆だといわれるが、どちらかだと簡単である。両者の関係の仕方こそが問題であらう。

エストニア共和国がソ連からの完全独立を要求しているとすれば、エストニア人はロシア人を「われわれ」とは考えにくい、またソヴィエト社会主義共和国連邦を「われわれの国」と考えにくいと思っているのであろう。そしてロシア人がエストニア人に同じアイデンティティを要求することが、エストニア人にとって苦痛なのであろう。

民族のアイデンティティの完結の条件は何なのか。独立であるといわれるのであろう。なぜそうなのか。しかし前述したように、少数民族を含まない国家はない。バルト3国が独立すると、ロシア人やポーランド人が少数民族となり、クロアチアやスロヴェニアが独立するとセルビア人その他が少数民族となる。

連邦制は重要な解決方法であらうが、やはり難点がある。すべてに満足である、残る不満は連邦にとどまっていることだという時には効き目がない（英連邦におけるアイルランドやインドの場合）。主権国家の連合となると、ますますこのことがいえる。あの国とだけは国家連合をくむことはいやであるという国には、連合は無意味である（フランス共同体におけるガーナ）。

民族のアイデンティティに無限定の価値を置くことは楽観的すぎる。このアイデンティティは諸刃の剣である（ハンデッガーがナチズムに足をすくわれたのはこの点においてではなかったらうか）。

- (5) 最後にイラク問題である。イラクは独立国家への侵略という一点において非難されて当然といえる。しかし戦争の本質はもともとイラクがなした様なことであり、ほんの半世紀ぐらい前までは、それが国際政治の常道であった。イラクが、はるかいにしへのバビロニア王国やネブカドネザル2世（ハビロンの栄華）を持ち出しているのを見ると、記憶としての歴史を思わせるをえない。またクウェートはイラクの一部であるという主張も歴史の糸のもつれである。

イラク問題は戦争の本質と集団的安全保障の観念との関係について根本的検討をせまっている。冷戦構造において幸運にも集団的安全保障の機能はマヒしていた。しかし冷戦構造の終結がイラクのクウェート侵攻を生み、同時に集団的安全保障が機能しうる条

件が生まれた。集団的安全保障の観念はことの重大さに立ちすくむばかりである。古来人間は武力をもって悪を為す、ことはとくいであった。しかし武力をもって善をなす、ことにはなれていない。せいぜい偽善か。つまり正義は戦争事由になりにくい。戦争に正義をかかげると、ものがはっきり見えなくなる。モーゲンソーもそういったのではなかったろうか。